

# 2010 / 2011 平成22年度



ジュニアヨットスクール葉山のスクール生たちが、葉山マリーナと伊豆大島を往復する外洋帆走にチャレンジ。個々のスクール生がチームワークやリーダーシップを発揮しながら往復52マイル(96キロ)の冒険航海を成功させた

## 子どもたちは夏に成長する! リーダーシップとチームワークを育む 往復52マイルの冒険航海。

長い歴史を持つジュニアヨットスクール葉山。その運営についてあらためて検討を行い、目指す方向として「全国のジュニアスクールのモデルとなる存在」と設定した。平成22年度はそれを具現化する第一歩となった。

通常のセーリング練習に加え、新たに組み入れられたのが各種の自然水辺体験学習の機会だった。ニュージーランドの学校教育の現場で採り入れられる「ウォーターワイズ教育」を参考に、「自分の身を自分で守る」ための講習や、「チームワークを育む」ための共通体験・共同生活機会の創出を目指した活動を次つぎに企画・実行していった。中でも全長13メートルほどのセーリングクルーザーで葉山と伊豆大島を往復する外洋帆走訓練は、スクール生たちに素晴らしい思い出と、大きな自信をもたらすことになった。指導者たちに見守られながら、高校生が舵手を担い、小中学生はコックピットやナビゲーターを担当した。リーダーシップとチームワークの強化は、この航海の重点目標の一つでもあった。

食事リーダーを担当した中学1年生は、「合宿で教えてもらった栄養についても考えながら、コーチと相談してバランスの良いメニューを考えたと話し、現在位置を確認する役割を任された小学6年生は、コンパスを片手に「大島が見えてきたときは本当に安心した」と真っ黒に日焼けした顔をほころばせた。

無事葉山に帰港した後、「普段の練習とは異なった環境で過ごしてみると、スクール生たちの別の面が見えてくる」と振り返ったのは同行した指導者の一人。「普段以上の力を発揮するスクール生、下級生の行動を見守りサポートする上級生など、今後の指導の参考になるようなそれぞれの個性を把握することができた」と、コーチ・スタッフ陣にとっても有意義なプログラムとなった。

3月11日、東日本大震災が発生。甚大な被害をもたらした未曾有の大災害に際し、スポーツ界も「スポーツの力」を結集してさまざまな救援活動や復興支援活動を展開した。震災直後に開催を予定していた第4回スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングは中止し、その代替としてエリア別の報告会を5会場で実施した。前年の8月には政府から「スポーツ立国戦略」が示され、スポーツ基本法制定に向けて動き出すと同時にスポーツ庁設置の声も高まっていった。

### スポーツチャレンジ助成事業

東日本大震災の発生により、3月14～16日に開催を予定していたスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングを中止。しかし、個々の成長のためにチャレンジ成果の共有機会は不可欠と考え、エリア別の小規模報告会を5会場で開催した。また、4年目を迎え、OB・OGのチャレンジにも顕著な成果が顕れ始めた。第1・2期生の岡本達也選手(サッカー)が目標のJリーガー復帰を実現したほか、近代五種の黒須成美選手が日本選手権を制してロンドンオリンピック出場に弾みをつけた。チャレンジャー相互の交流を深めるために、CNS(チャレンジャーズ・ネットワーク・システム)をこの年から導入した。



#### ■平成22年度(第4期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	46件	9件	640万円
研究助成	84件	11件	1,305万円
奨学生	20件	3件	360万円(1年分)
計	150件	23件	2,305万円

### スポーツ振興支援事業

#### ■ジュニアヨットスクール葉山

自然体験学習のカリキュラムを充実させ、夏休み期間にあたる7～8月にかけて水辺安全講習会、黒姫高原トレッキング、伊豆大島外洋帆走訓練、逗子海岸清掃ボランティアを実施した。スクール生のさらなる成長を促すとともに、モデルスクール化に向けて実施後の各種調査とその分析を行った。なお第19回セーリング・チャレンジカップN浜名湖は、東日本大震災の深刻な状況を踏まえ中止した。



#### ■スポーツ教材の提供

申請方法の簡便化を図ったことなどから申請数が増加(611件)し、抽選により47団体にスポーツ教材を提供した。また、新学習指導要領を受け全国の学校では子どもたちの体力向上に向けた取り組みが活発化している状況から、事務局が現場を訪問し、ロールモデルとなる優良事例をホームページで紹介する取り組みを強化した。

#### ■全国児童 水辺の風景画コンテスト

「美しい海」「動く海」「楽しい海」「生きる海」をテーマにした作品を募集し、全国の幼稚園、保育園、小学校、絵画教室などから前年度の1.6倍となる8,307点の作品が寄せられた。



### スポーツ文化・啓発事業

#### ■第3回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



[功労賞] 高田 静夫 氏  
日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用



[奨励賞] 中村 宏之 氏  
雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践



[奨励賞] 中北 浩仁 氏  
強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ